

# 戦後日本の国際スポーツ界復帰に関する ダグラス・マッカーサーの役割について

和所 泰史\*

## 抄録

1945年8月14日にポツダム宣言を受諾した日本は、GHQを中心とした占領下となった。このGHQの最高司令官として1951年4月11日まで在職していた人物がアメリカのダグラス・マッカーサー元帥である。マッカーサーは1927年からの2年間アメリカ・オリンピック委員会の委員長を務めており、1928年第9回オリンピック・アムステルダム大会のアメリカ選手団団長であった経緯を持つ。以上の経緯から、マッカーサーは当時の国際オリンピック委員会（IOC）の委員らとも面識があり、戦後日本の国際スポーツ界復帰過程において重要な役割を果たしたものであると思われる。本研究の目的は、国内史料およびアメリカ、バージニア州ノーフォークにあるマッカーサー記念館の史料から、マッカーサーが日本の国際スポーツ界への復帰過程で果たした役割を明らかにすることである。

本研究で明らかになった点は主に以下の3点である。

- ① 1948年IOC ロンドン総会に日本人を出席させるための重要な人物と位置付けられていた。
- ② 1951年IOC コペンハーゲン総会時に日本人の出席者が不能になった際に日本代表として東龍太郎を推薦していた。
- ③ 1952年第15回オリンピック大会に日本の参加が可能となっている世界情勢になることを願っていると各方面のスポーツ関係者に伝えていた。

マッカーサーが日本の国際スポーツ界復帰を願っていた理由は、日本の民主主義社会の実現と戦後の復興のための熱意を持たせるために必要であると考えていたためである。1948年第14回オリンピック・ロンドン大会に日本は招待されなかったが、翌1952年第15回オリンピック・ヘルシンキ大会から復帰を果たす。その過程でマッカーサーはIOC副会長のブランデー、IOC委員のJ・J・ガーランド、アマチュア競技連盟のフェリス、シムスといったアメリカのスポーツ関係者と連絡を取り、日本の国際スポーツ界復帰を導く重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。

キーワード：ダグラス・マッカーサー、国際オリンピック委員会（IOC）、国際オリンピック大会、GHQ、占領下

---

\* 環太平洋大学 〒709-0863 岡山市東区瀬戸町観音寺 721

# On the Role of Douglas MacArthur on the Return of the International Sports World after the War

Yasushi Washo \*

## Abstract

Japan accepted the Potsdam Declaration on August 14, 1945 and submitted to occupation by the General Headquarters (GHQ) of the United States, commanded by General Douglas MacArthur. MacArthur had been president of the American Olympic Committee for two years, since 1927, and served as head of the delegation of the IX Olympiad in Amsterdam in 1928. Based on these circumstances, MacArthur must have been familiar with International Olympic Committee members at the time and played an important role in Japan's postwar reintegration into international sports. Using historical materials in Japan and from the MacArthur Memorial in Norfolk, Virginia, USA, this study clarifies MacArthur's role in the process of Japan's reintegration into international sports.

The study examines the following three points:

- ① He was positioned as an important person, to attend the Japanese delegation at the IOC London Session in 1948.
- ② His recommendation for Ryotaro Azuma to be a part of the Japanese delegation when Japanese IOC members were impossible at the IOC Copenhagen Session in 1951.
- ③ His statement to sports officials that he wished to be in a world situation in which Japanese participation was possible at the XV Olympiad Games in Helsinki in 1952.

MacArthur about Japan's postwar reintegration into international sports, wished for this reintegration to support Japan's attempt to implement a democratic society and to contribute to the enthusiasm for postwar reconstruction. Japan had not been invited to the XIV Olympiad Games in London in 1948 but did participate in the XV Olympiad in Helsinki. During the process of Japan's reintegration, MacArthur contacted such U.S. sports officials as Brundage, the IOC Vice President, John Jewett Garland of the IOC Committee, and Ferris and Simms of the Amateur Athletic Union, among others, to urge them to allow Japan back into the Olympic Games. MacArthur obviously assumed an important leadership role in reintegrating Japan into postwar international sports.

Key Words : Douglas MacArthur, International Olympic Committee, Olympiad, General Headquarters, Occupied Japan

---

\* International Pacific University 721 Kannonji, Seto-cho, Higashi-ku, Okayama JAPAN 709-0863

## 1. はじめに

1945年8月14日にポツダム宣言を受諾した日本は、GHQ (General Headquarters、連合国軍最高司令官総司令部) を中心とした占領下となった。翌8月15日から1951年4月11日までGHQの最高司令官として在職していた人物がアメリカのダグラス・マッカーサー元帥 (General Douglas MacArthur) である。

マッカーサーは軍人としての評価もさながら、スポーツの分野においても様々な功績を残している。1927年にアメリカ・オリンピック委員会の委員長となったマッカーサーは、この時のことを「ブラウトの死後の空白を埋めるため、私が委員長の地位に選ばれて米オリンピック・チームの総監督の責任を負わされた時には、さすがに私も心底からおどろいた」(マッカーサー, 1964) と述べている。マッカーサーは翌1928年に開催された第9回オリンピック・アムステルダム大会のアメリカ選手団団長を務め、その後、委員長を退任した。また戦後、占領下の日本でも自らの名を冠した全国的スポーツ競技大会「マッカーサー元帥杯」が開催されていた。このマッカーサー元帥杯は、大久保・山岸 (2004) によると、硬式テニス、軟式テニス、卓球の3種目が行われており、優勝カップにはマッカーサー自らがサインをしていたとされている。このマッカーサー元帥杯は、マッカーサーが最高司令官を退任し、人気の凋落を背景に第8回 (1954年松山大会) を最後に事実上廃止された。

以上のような経緯から、マッカーサーはスポーツに対する理解が強く、また過去にアメリカ・オリンピック委員会の委員長を務めていたため、IOC (International Olympic Committee、国際オリンピック委員会) の委員らとも面識があり、戦後日本の国際スポーツ界復帰過程においても重要な役割を果たしていたものと思われる。

## 2. 目的

本研究の目的は、GHQ 最高司令官であったダグラス・マッカーサーが戦後日本の国際スポーツ界への復帰過程において、どのような役割を果たしたかを明らかにするものである。これまで国内では、GHQ による国内の体育政策について検討されてきた研究は種々見られるものの、国際的スポーツ活動にあたる国際スポーツ界への復帰に視点を向けた論文は存在しない。その中でも本研究は、当時の日本国内での最重要人物とも言えるダグラス・マッカーサーの見解に着目したものである。現代の日本は戦争とは無縁な国になりつ

つあり、国際オリンピック大会や国際スポーツ競技大会への参加は当然となっている。しかし、過去に日本が味わった敗戦だけでなく、オリンピック大会や国際スポーツ大会への復帰に向けた努力が、今日、スポーツを何不自由なくこなす我々にとって、客観的に認識しなければならない過去である。本研究で明らかにする内容は、今後、2020年第32回東京オリンピック・パラリンピック競技大会を開催する日本やIOCが平和を見つめなおす一助となり、オリンピック・パラリンピックの重要性を唱えるための資料となりうる。

## 3. 方法

本研究は一次史料および二次史料の検討により明らかにしていく。検討する一次史料は、国立国会図書館に所蔵されているGHQ/SCAP史料および、アメリカ、バージニア州ノーフォークにあるマッカーサー記念館に所蔵されている史料である。マッカーサー記念館史料に関しては、マッカーサー記念館の司書James W. Zobelに1945年以降の日本の国際オリンピックおよび国際競技大会復帰問題に関連する文書を検索してもらい、GHQの占領下にあたるRG-5の“Records of General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers (SCAP), 1945-1951”内の文書と私書にあたる-10の“General Douglas MacArthur's Private Correspondence, 1848-1964”の文書を収集した。

## 4. 結果及び考察

本研究で検討し、マッカーサーが日本の国際スポーツ界復帰に対して明らかになった役割は主に以下の3点である。

- ① 1948年IOCロンドン総会に日本人を出席させるための重要な人物と位置付けられていた。
- ② 1951年IOCコペンハーゲン総会時に日本人の出席者が不能になった際に日本代表として東龍太郎を推薦していた。
- ③ 1952年オリンピック大会に日本の参加が可能となっている世界情勢になることを願っていると各方面のスポーツ関係者に伝えていた。

以下では、これら結果および考察の詳細について述べていく事とする。なお、当時日本のNOC (National Olympic Committee、国内オリンピック委員会) を担っていた組織は、現在の日本スポーツ協会の前身である「日本体育協会」および、その前身の「大日本体育会」である。大日本体育会が名称を「日本体育協会」とした日は、1948年11月13日であるため、本研究

の検討時期は本来なら2つの名称が混在する。そこで混乱を避けるため、また、本研究の検討時期は、ほぼ「日本体育協会」の時期に当たるため、本研究では全て「日本体育協会」で統一して記述することとする。

#### 4.1. 1948年IOCロンドン総会への日本人代表出席者問題

日本の降伏後、最初のIOC委員による会議は、1945年8月24日～26日にロンドンで開催された。これは当時のIOC理事によって行われる予定であった会議である。しかし、このときの出席者はスウェーデンのジークフリート・エドストローム (J・Sigfrid・Edström)、アメリカのアベリー・ブランデージ (Avery Brundage)、イギリスのバーレー卿 (Lord Burghley) のわずか3名であった。

表1 戦後のIOC総会

年	月日	開催地
1946	9月4日～6日	ローザンヌ
1947	6月19日～21日	ストックホルム
1948	1月29日～31日 2月2日	サン・モリッツ
	7月27日～29日 8月13日	ロンドン
1949	4月25日～28日	ローマ
1950	5月15日～17日	コペンハーゲン

そして表の通り、戦後最初のIOC総会は、1946年9月ローザンヌで開催された。この総会で、正式にエドストロームがIOC会長、ブランデージが副会長に任命された。翌1947年6月には、ストックホルムでIOC総会が開催され、当時の日本体育協会は共同通信社を通じて、会長であるエドストロームや書記長であるオットー・メイヤー (Otto Mayer) と連絡を取り合うことに成功した。そして、翌1948年1月の第5回冬季オリンピック・サンモリッツ大会の前後に開催されたIOC総会には、日本に招待状が来たものの、GHQからの渡航許可が下りず、出席を断念する。

次に日本体育協会は1948年第14回オリンピック・ロンドン大会の前後に開催される予定のIOC総会出席を目指した。1948年4月28日の日本体育協会評議員会では、「日本人の海外旅行が緩和されたため、氏名、目的、旅行先等を記してGHQに申請し、その許可を得れば海外旅行が可能になったため、今夏ロンドン・オリンピックの際のIOC出席問題及び改正オリンピ

ック規程の研究と共に5月5日午後2時からオリンピック準備委員及び関係種目代表者との打合せを開く旨を説明した」とある。次に1948年6月9日の第7回理事会では高島文雄理事より「1、松本龍蔵氏からGHQにロンドン総会の説明をして日本代表の出席について賛意を得ている。2、松本氏からアメリカのブランデージ氏に宛てた5月25日付の書簡の返事が到着次第、第2段の手続きをとる。3、エドストローム氏に招待状の送附を懇請する。4、フィリピンU・S船会長の来日の際に同氏を介してマッカーサー元帥に懇請する」とある。このように、当時の日本体育協会は、IOCロンドン総会の出席には、IOC会長であるエドストローム、副会長であるブランデージ、GHQ最高司令官であるマッカーサーにロンドン総会出席を懇請することが重要であると考えていたことがわかる。

では、これら日本体育協会の働きかけにIOC関係者やマッカーサーはどう動いたのであるだろうか？まず、当時IOC委員であった永井松三が1948年6月12日、ブランデージに「IOCロンドン総会へ出席ためNOC会長東龍太郎と事務局長高島文雄と私自身の許可証を、SCAPへあなたから推薦していただけることを要請します」との電報を送っている。また、永井がブランデージに電報を送った翌日には、エドストロームがブランデージに「永井のロンドン・オリンピック総会へ来る為の承認をマッカーサー元帥へ電報で送って下さい」との電報を打っている。永井は3人の出席を希望していたことに対して、エドストロームは永井1人で十分と考えていたようであった。

エドストロームの電報を受け、2日後にあたる6月15日、ブランデージはマッカーサーへ電報を打った。

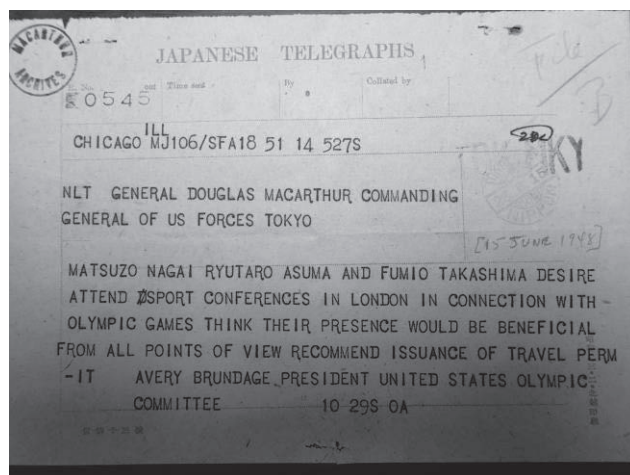


図1 ブランデージからマッカーサー宛電報 (1948年6月15日付)

図1に示したように、その内容は「永井、東、高島

はオリンピック大会に関するロンドンでのオリンピック総会に参加したいと望んでいます。あらゆる観点から見て、彼らの出席は有益だと思しますので、渡航許可証を発行して下さる事を勧めます」との内容であった。当時 IOC 副会長のみならず、アメリカ・オリンピック委員会の委員長でもあったブランデーは、マッカーサーの後任として委員長になった人物である。そのため、IOC 委員の中でもとりわけマッカーサーとの面識が強かったため、前述したような電報を打つことが出来たと思われる。

しかし、結果的に日本人の代表者がロンドン総会に出席することは認められなかった。国内史料では永井が「ロンドン総会はイギリスが招聘しなかった事実には過ぎない」とのみ報告しているが、その理由にまでは言及されていない。

#### 4.2. 1951 年 IOC コペンハーゲン総会への日本人代表出席者問題

前項で示したように、1948 年の IOC ロンドン総会に出席できなかった日本体育協会は、翌 1949 年のローマ総会出席を目指した。この総会参加は、ドル貨の調達に苦戦したが、米谷克巳を中心に組織されたオリンピック基金委員会がハワイで募金活動を行い、5,000 ドルの調達に成功した。これにより、日本体育協会は IOC 委員である永井松三の渡航を実現させ、この IOC ローマ総会が日本代表の戦後初出席であった。しかし、ローマ総会中に体調を悪化させた永井はイタリアのバチカンで入院し、帰国後も体調不良が続くこととなった。これにより、永井が翌年のコペンハーゲン総会に出席することが困難となってしまった。

戦後の日本人の IOC 委員は、副島道正、高石眞五郎、永井松三の 3 名が在職していた。しかし、副島道正は 1947 年ごろから病氣となり、1948 年 10 月に逝去したため、逝去後は IOC 委員のリストから外れていた。次に高石眞五郎は、戦時中は大阪毎日新聞社の会長を務めたことで、GHQ が 1946 年 1 月 4 日に発令した公職追放令により、サンフランシスコ講和条約が発効される 1952 年まで、一切の職を失っていた。そのため、当時 IOC 委員としても活動することができた唯一の人物が永井松三であったが、その永井も体調を壊し、IOC コペンハーゲン総会への出席が不可能になったのである。永井の IOC ローマ総会出席後、日本の各競技団体は水泳、レスリングを始め、次々と IF (International Federations、国際競技連盟) への復帰を果たしていた。そのため、日本代表が IOC コペンハーゲン総会に欠席すると、日本の国際オリンピック

大会への復帰が危ぶまれる可能性があったため、出席できない事態は避けたかったのである。

IOC コペンハーゲン総会の日本人代表出席問題の発端は、1950 年 1 月 6 日、エドストロームが高石眞五郎に手紙を送ったことで明らかとなった。その手紙を読むかぎり、高石は 1949 年 12 月 23 日、エドストロームに、自分が IOC コペンハーゲン総会に行きたいとの旨を伝えていたことが明らかとなった。1 月 6 日の手紙において、エドストロームは、日本人として唯一出席が可能であった高石に「5 月にコペンハーゲンでお会いできることを楽しみにしています」と述べていた。この見解から、エドストロームは、コペンハーゲン総会の日本人出席者は、高石になると考えていたことがわかる。高石は、このエドストロームの手紙の返信を 2 月 17 日に送っており、高石は「私のパスポートの申請が認められるか、拒否されるか、その可能性はである」と述べていた。また、「もし、私の申請が断られた場合、可能であるならば、私の代理としてコペンハーゲンに、日本国内オリンピック委員会の会長である東龍太郎を送りたい。そのため東へ招待状を送ってもらえないだろうか」と懇請していた。

同時期である 2 月 18 日、IOC 副会長のブランデーは、マッカーサーに手紙を送った。「日本スポーツ界の未来のために、IOC 総会へ誰か一人の出席者がほしい。そのため、公職追放の身である高石のコペンハーゲン総会出席を認可していただきたい」との内容であった。このブランデーの手紙を見る限り、ブランデーもエドストロームと同様に、日本人の出席者は、高石しかいないと考えていたことがわかる。また、ブランデーが、日本人のコペンハーゲン総会への出席を求めていたことから、エドストロームと同じく、日本の国際スポーツ界復帰のためには、IOC 総会への出席が必要であると考えていたと思われる。同日、ブランデーは高石にも手紙を送り、その内容には「同封してあなたには、マッカーサー元帥への手紙のコピーをお渡します。あなたがコペンハーゲン総会に出席すべきであり、それは日本スポーツ界にとって、とても重要なことです。マッカーサー元帥は、約 20 年前、アメリカ・オリンピック協会の会長で、私の前任者であり、アマチュアスポーツに興味を持ち続け、共感してくれる自信があります。コペンハーゲンであなたに会えることを楽しみにしています」と述べていた。

マッカーサーは、このブランデーの手紙の返信を同年の 3 月 4 日に送っていた。しかしながら、その内容はブランデーおよびエドストロームの意図に沿った内容ではなかった。

マッカーサーは「あいにく、高石氏は国際オリンピック委員会からは受け入れてもらえているものの、国際業務の日本を代表する資格はありません。さらに、高石が出席した場合、総会に出席した他国の方々から悪影響を与えることになると思われる。そのため、今年コペンハーゲン総会に高石の出席を承認することはできません。永井の身体を見るかぎり、総会出席は困難であり、高石は日本代表として国際業務を担うには不適格なため、現在の日本はIOC委員として業務を担う委員が存在しません。ご存知とは思いますが、日本の国内オリンピック委員会は1949年12月、再編成され、1950年2月には会長に選ばれた東が、IOC委員の後任になる人物として任命されました。そのため、私の提案としては、あなたが永井か高石の後任委員として、コペンハーゲン総会に出席するための東の招待状を送るよう打診していただきたい。もしくは、これが不可能であるならば、オブザーバーとして東博士を出席させていただきたい」との要望を出していた。このマッカーサーの見解は、IOCや日本体育協会の内情を詳しく理解したうえで判断したものと思われる。特に公職追放の高石の出席を容認しなかったことは、IOC内部の対日感情を考慮し、かつ、GHQ最高司令官としての規律を厳守していた姿がうかがえる結果となった。このマッカーサーの見解を聞いたブランデーは、会長のエドストロームに伝達し、エドストロームは東龍太郎にコペンハーゲン総会の招待状を1950年3月20日に送ったのであった。こうして、東が当初はオブザーバーとして出席したIOCコペンハーゲン総会で、永井に代わるIOC委員として任命され、日本の国際オリンピックへの参加は翌年のIOCウィーン総会で正式に決定した。

#### 4.3. 日本の1952年オリンピック大会参加についての見解

マッカーサーは1948年のオリンピック大会の日本参加について言及した史料はほとんど見当たらなかったが、1952年のオリンピック大会に参加について言及した史料はいくつか見られた。

1948年オリンピック大会が終わった後、1948年12月6日にはマッカーサーが「国際競技は平和の創設者であり、私は1952年のオリンピックには日本が参加出来るような国際情勢になることを希望している」との言明をAP通信に述べたことが各新聞で報じられていた。

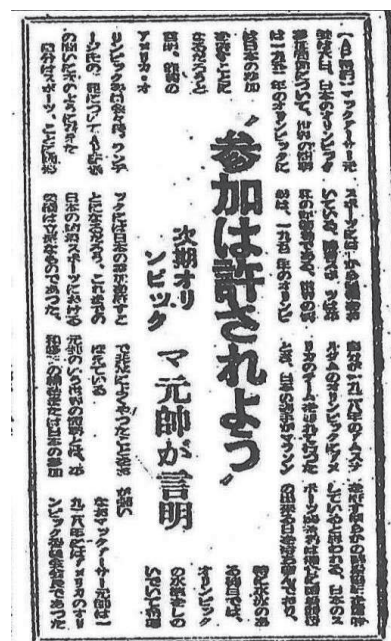


図2 朝日新聞、1948年12月7日、2面

このマッカーサーの声明の日、1948年12月6日には陸軍の広報担当を務めていたデグリン (T. L. Deglin) がマッカーサーへ「あなたの日本人が1952年オリンピック大会に参加出来る情勢を望むとの見解を見て、オリンピックガイドの写しを1,000部日本人に配布しましょうか？」との申し出を行っていた。このデグリンの申し出に対してマッカーサーは1948年12月24日に返事をして、デグリンの申し出に感謝を述べたうえで「日本が1952年のオリンピックに参加することが可能な情勢になってくれていることを私は希望しています。これは民主主義社会を形成するために必要不可欠です」との見解を示していた。

また、1949年2月21日には、前年にIOC委員に就任したアメリカのガーランド (John Jewett Garland) から「今年のローマ総会において我々の同僚たちが日本へ同情的となることで、その感情が日本の復帰に影響されるでしょう。私は個人的に1952年、世界の国々と競技者として日本が受け入れられる準備があるかについて、あなたの意見が重要な影響を与えると考えている」との手紙を受け取っていた。このガーランドの手紙にマッカーサーは同年3月10日に返信をして「日本が1952年に参加できるかの質問については、その望みはさておき、現段階でそれを保証するような回答を言うことは出来ません。私の個人的な希望としては、1952年に世界の他の国々とともに日本人も競争者であることが可能な情勢になってくることが望んでいます」との見解を述べていた。ガーランドは翌年の1950年IOCコペンハーゲン総会で、この

マッカーサーの手紙を読み、IOC 委員にマッカーサーの見解を伝えていた。すなわち、このマッカーサーの見解は日本の国際スポーツ界復帰を後押しする大きな鍵となっていた。

他にも、AAU (Amateur Athletic Union) のフェリス (Daniel J. Ferris) から 1950 年 5 月 5 日にアメリカのアマチュア競技連盟から日本のアマチュア競技連盟への招待状を送ったことへの連絡を受けた後、6 月 1 日には「私は日本の国際スポーツへの参加は、民主主義の真の意味を日本人と世界に理解してもらうために計り知れない価値があると確信しています」と述べていた。

## 5. まとめ

本研究は、戦後日本の国際スポーツ界復帰に関するダグラス・マッカーサーの見解を様々な史料から検討し明らかにしたものである。過去にアメリカ・オリンピック委員会の会長を務め、スポーツ関係者とも面識が強かったマッカーサーは日本の国際スポーツ界復帰を望んでいたことが明らかとなった。マッカーサーは日本が国際スポーツ界に復帰することに関する直接的な名言は避けていたが、個人的な希望として日本の民主主義を実現する上で国際スポーツへの参加は必要であるとの見解を示していた。また、マッカーサーは 1950 年の IOC コペンハーゲン総会の日本代表出席者を IOC 会長、副会長にも進言する等、間接的に日本の復帰を後押ししていたことが明らかとなった。マッカーサーのような影響力の強い人物の発言、見解が日本の国際スポーツ復帰を導く一因となっていたことは、戦後の日本スポーツ史に示すべき重要な出来事であったと言えるだろう。

### 【参考文献】

朝日新聞. 1948 年 12 月 7 日 6 面.

Brundage to MacArthur. letter dated June 15, 1948.

Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 44, Folder 2.

Brundage to MacArthur. letter dated February 17, 1950. Douglas MacArthur Memorial, RG-10 box 116, Folder 10.

Brundage to Takaishi. letter dated February 18, 1950. GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section, Box 5406, Folder 12.

ダグラス・マッカーサー著・津島一夫訳 (1964) マッカーサー回想記 (上). 朝日新聞社 : 137-140.

Daniel Ferris to MacArthur. letter dated May 5, 1950. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 5, Folder 4.

Deglin to MacArthur. letter dated December 6, 1948. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 14, Folder 1.

Edström to Brundage. letter dated June 13, 1948. Avery Brundage Collection, box 45, Folder 7.

Edström to Takaishi. letter dated January 6, 1950. GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section, Box 5406, Folder 12.

Edström to Azuma. letter dated March 20, 1950. GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section, Box 5406, Folder 12.

John Jewett Garland to MacArthur. letter dated February 21, 1949. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 44, Folder 2.

Nagai to Brundage. letter dated June 12, 1948. Avery Brundage Collection, box 61, Folder 17.

日本体育協会第 1 回評議員会議事録. 1948 年 4 月 28 日.  
日本体育協会第 27 回理事会議事録. 1948 年 11 月 17 日.  
日本体育協会第 30 回理事会議事録. 1948 年 12 月 8 日.  
日刊スポーツ. 1948 年 12 月 8 日 4 面.

MacArthur to Deglin. letter dated December 24, 1948. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 14, Folder 1.

MacArthur to John Jewett Garland. letter dated March 10, 1949. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 44, Folder 2.

MacArthur to Daniel Ferris. letter dated June 1, 1950. Douglas MacArthur Memorial, RG-5 box 5, Folder 4.

大久保英哲・山岸孝吏 (2004) マッカーサー元帥杯スポーツ競技会の成立と廃止. 金沢大学教育学部紀要 教育科学編, 53 巻 : 89-100.

週刊スポーツ毎日. 1948 年 12 月 11 日 6 面.

Takaishi to Edström. letter dated February 17, 1950. GHQ/SCAP Records, Civil Information and Education Section, Box 5406, Folder 12.

読売新聞. 1948 年 12 月 7 日 2 面.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。